

日本ヘーゲル学会

第32回研究大会

2021年6月12日(土)

オンライン開催

*参加方法については別添のオンライン大会マニュアルをご参照ください。



日本ヘーゲル学会事務局

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学文学部哲学科 三重野研究室

TEL: 03-3945-7355 | E-Mail: hegel-jimukk@hegel.jp

郵便振替口座: 00150-1-10718 日本ヘーゲル学会

*大会へのご参加は学会 HP 上「第 32 回研究大会特設サイト」からお願いします。パスワードが必要です。詳細は「オンライン大会マニュアル」を併せてご覧ください。マニュアルは HP 上でも随時更新予定です。

【プログラム】6月12日（土）

- 9時30分～11時30分：合評会

池松辰男『ヘーゲル「主観的精神の哲学」

—精神における主体の生成とその条件—』（晃洋書房、2019年）

評者：岡崎秀二郎（東京大学）、加藤紫苑（京都大学）、川瀬和也（宮崎公立大学）

司会者：山田忠彰（日本女子大学）

- 11時40分～12時20分：総会

休憩

- 13時30分～14時10分：個人研究発表

「判断の統一と根拠としての概念：「根源的分割」としての判断を再考する」（要旨報告20分・質疑20分）

発表者：木本周平（東京都立大）

司会者：山脇雅夫（同朋大学）

- 14時20分～17時20分：シンポジウム

「ヘーゲル生誕250年記念シンポジウム「ヘーゲルと哲学史」

（30分報告×3、相互質問10分×3、フロア質疑50分、途中5分休憩2回）

提題者：石川伊織（新潟県立大学）

下田和宣（成城大学）

三重野清顕（東洋大学）

司会者：山口誠一（法政大学）

【合評会：池松辰男『ヘーゲル「主観的精神の哲学」—精神における主体の生成とその条件—』（晃洋書房、2019年）】自著紹介

池松辰男（島根大学）

ヘーゲルの「精神哲学」体系のうち「主観的精神の哲学」は、他の部分に比べると、一般の知名度の点でも研究史上の関心の点でも、従来いささか低く見られてきた憾みがある。しかし、主体の生成過程を解明するうえでも、その延長線上にある、客観的精神あるいは近代の人倫の可能性を問い直すうえでも、主観的精神の哲学の再考は本来、避けては通れないように思われる。それはまた、ヘーゲルの思考へしばしば寄せられてきた批判—主体の概念が意識の構造を中心としていること、そしてそのために、その思考が体系のうちにいけば閉ざされていること—に対して、新たな応答を試みることにもつながるはずである。

拙著は、以上の観点のもと、近年出揃った新たなテキストをも活用しながら、「主観的精神の哲学」におけるヘーゲルの思考の全体像とその意義を解明しようとしたものである。著書を構成するにあたっては、第一部で『エンチクロペディー』を中心に「主観的精神」の全体像を俯瞰して、議論全体の前提をあらかじめ共有したうえで、第二部で改めて、発展史的観点も含めて個々の論点の意義を検証するという形式がとられた。

その第二部でとりわけまず着目したのは、ヘーゲルにおける「没意識」的契機（「堅坑」）と、「習慣」的契機（「（身体の）習慣」「言語」）の持つ役割である。二つの契機のいずれもそれ自体としては意識や思考の境位と相容れるものではないが、そうした境位そのものの生成は、いずれの契機を欠いても説明できないのである。同様にまた、ヘーゲルが意識や思考の活動、ひいては承認の過程でさえも、つねに身体の習慣の延長線上で、「第二の自然」としてとらえていた点も無視できない。それはまた、「客観的精神の哲学」において同じ「第二の自然」として展開している契機、すなわち「人倫」と主体との関係や、そこに含まれる問題の根本を再考することにもつながる。たとえば「第二の自然」は市民社会においてはたんなる「機械制」に顛倒すると、ヘーゲルは見ていた。そしてその事態はけっして偶然ではなく、そもそも「機械制」としての習慣を持つことで意識や思考の境位が可能になるという、あの主体の生成の条件をいわば裏返したもののなのである。

他方、主観的精神の哲学には、以上のような人倫の課題を、主体の生成過程内部から超克する可能性も示されているように思われる。拙著では、「人間学」と「心理学」が同じ構造を反復していることや、「狂気」を巡るヘーゲルの視点などに着目しながら、主体がその生成過程を引き受け直す可能性を指摘した。とりわけ、「情熱」というすぐれて没意識的な契機を通じて「世界史的個人」が活動することの意義は、従来の歴史哲学の解釈—「理性の狡智」を欲求の体系になぞらえる解釈—を超えて評価され直されるべきと、拙著では解釈している。その活動は、欲求の体系を通じて既存の承認内部で主体の生成過程を繰り返すことではなく、むしろ主体と人倫そのものを新たにするほうにこそ、開かれているからである。

とはいえ果たして、こうした一連の読みが、ヘーゲルの意図や、体系の他の部分を適切に汲むものなのかどうか。主観的精神の哲学の意義を、哲学的にみて他にどう評価すべきかといった課題ともあわせて、忌憚のないご高評を賜りたい。

【個人研究発表 要旨】

判断の統一と根拠としての概念：根源的分割としての判断を再考する

木本周平（東京都立大学）

本稿はヘーゲルの判断に関する主張、いわゆる「判断＝根源的分割」説を考察の対象とする。この表現は『大論理学』の「判断論」において提示されるが、それがヘーゲル研究においても正面から議論の対象となることはまれである。この考えに対する言及の多くは、判断の成立が概念の根源的分割にもとづくというヘーゲルの言葉を繰り返すか、あるいはこの主張の哲学的な価値については中立的にその表現の歴史的経緯としてヘルダーリンを示唆するかに留まる。その背景にはヘーゲル自身による説明の欠如という事情がある。だがこの考えを素通りすることによってヘーゲルの判断論全体の眼目が不明瞭になってしまうように思われる。本稿はヘーゲルのこの主張を判断の統一に関する特殊な見解として提示し、ヘーゲルが判断論を通じて「そもそも何をやっているのか」を明らかにすることを目標とする。

「概念論」の冒頭の「演繹論」への言及は、ヘーゲルの判断論が特定の文脈のうちにあることを示している。カントはB版演繹で、再生的構想力にもとづく表象の寄せ集めを主観的統一とし、これを悟性のもつ客観的な統一から区別するが、後者が統一へともたらされるのは判断という形式を通じてのみだ、という。これは判断を構成する諸要素を寄せ集めたとしてもそれだけで判断が成立しえないということであり、判断が部分へと還元不可能な一つの機能としてあるという主張である。カントの主張は超越論的論証という特殊な文脈を越えて19世紀後半の哲学的論理学の基本的な主題の一つとなる。そのきっかけを与えたのがヘーゲルとほぼ同時代の論理学者ボルツァーノである。ボルツァーノは自身の命題概念に基づいて、根源的分割としての判断という考えを退ける。ボルツァーノ以降の哲学的論理学が判断（命題）の自存性ないし優位性という方向へと向かったのに対して、ヘーゲルは概念が判断に対して根拠として優位性をもつという（表面的には）反動的に見える立場をとる。だがここにヘーゲルの独自性があり、また考察の価値のある主張が含まれている。

判断が概念の根源的分割であるとは、それが概念に根拠をもつこととして言い換えられ、そしてこの主張はさらに判断論の最終部で、概念が規範性を含むこととして言い換えられる。ヘーゲルの一連の議論は、主語述語からなる複合体が単に文法的な構築物ではなく概念的に有意味な統一体であると言えるための前提へと遡っていくという構成になっている。判断論がある種の根源性を問題とするのはこうした前提への問いがあるからである。この議論は同時に、判断的な統一の前提となる概念が、従来の論理学者や経験主義者の考える「抽象的普遍」ではないという批判的議論を伴う。抽象による形成物(表象)には概念的な理解に固有の体系性、規範性、推論的連関といったものが欠けており、そうしたものを欠くとすれば判断の統一が説明のつかないものになってしまうからである。本稿はヘーゲルの判断論の「概念論」という性格を強調し、判断の統一を概念構造の観点から説明する立場として提示することを試みる。

【ヘーゲル生誕 250 年記念シンポジウム「ヘーゲルと哲学史」】

【シンポジウム趣意】

近年、哲学史研究と哲学との関係が改めて問われている。2017 年の日本哲学会では、「哲学史研究の哲学的意義とはなにか？」をテーマにシンポジウムが開催され、活発に議論が交わされた。

ところで、哲学史研究の哲学的意義を正面から考察した最大の哲学者がヘーゲルであることは、議論を待たないだろう。哲学史研究の哲学的意義について、ヘーゲルに立ち戻って、改めて考察することが、今こそ必要である。

「哲学史」は狭い意味でのヘーゲル研究内においても、現在重要なトピックの一つとなっている。なぜなら、哲学史講義を含むヘーゲルの講義についての新資料が次々と入手可能になり、今度はそこからどのような議論を取り出せるかが研究の焦点となりつつあるからである。講義において展開された哲学史についてのヘーゲルの叙述を詳細に検討する研究は、将来のヘーゲル研究のあるべき姿をいち早く示すものともなるはずである。

本シンポジウムでは、「ヘーゲルにとって哲学史とは何か？」そして、そもそも「哲学にとっての哲学史研究の意義とは何か？」「哲学史研究はどのようなものであるべきか？」という観点から、哲学と哲学史の関係を変更して問い直したい。このために、会員の 3 名の先生にご登壇いただく。

石川伊織先生には、「ヘーゲルにとって哲学史とは何か？」という観点から、ヘーゲルが哲学史にどのような意義を見出していたか、ヘーゲルに即して内在的に論じていただく。この提題により、シンポジウム全体の基礎を為す観点をご提示いただく。

下田和宣先生には、「哲学にとっての哲学史研究の意義とは何か？」という観点から、20 世紀ドイツの概念史研究を参照しながら、ヘーゲルの哲学史理解がどのような意義を持つかを論じて頂く。哲学にとって哲学史はそもそも重要なのか、重要だとしたらそれはなぜか。これらの点について、ヘーゲルの哲学史論と関連付けて論じていただく。

三重野清頭先生には、「哲学史研究はどうあるべきか？」という観点から、ヘーゲルの哲学史論と関連付けつつ、哲学史研究はどうあるべきかについて論じていただく。これにより、哲学史を研究するものとしての我々が、ヘーゲルの哲学史論をどう受け止めるべきかに光を当てていただく。

これらの提題により、ヘーゲル哲学に基づきながら、「哲学史の意義」を改めて問い直す機会とする。この議論を通じて、同時に、ヘーゲルにとって哲学史とは何であったのかということも改めて問われることとなるだろう。

【シンポジウム要旨—提題 1】

ヘーゲルにとって、そして我々にとって、「哲学史」とは何か

石川伊織（新潟県立大学）

続々と刊行されるヘーゲルの講義録についての研究が明らかにしつつある根本的な問題は、ヘーゲルのいわゆる「体系」とこれらの講義との折り合いの悪さである。もちろん、ヘーゲルが生涯にわたって体系構築の努力を続けたことは周知の事実ではある。しかし、この試みは「試行錯誤の迷走現象に陥っている」（山口誠一「ヘーゲル哲学史の体系的位位置」（久保陽一編『ヘーゲル哲学体系の見直し』理想社 2010、S.148）とも評される。この問題を、哲学史を学ぶという観点から考えた場合、どのように理解したらよいただろうか？

すでに『精神現象学』において明らかであるが、ヘーゲルの重要な関心事であったのは、「体系」と「歴史」であった。そこで問題とされたのは実体と主体との同一性であり、絶対精神へと至る運動は、実体の主体化であるとともに、主体の実体化としても展開された。実体の自己展開は自己意識の自覚の過程とパラレ

ルである。『精神現象学』は、実体の自己展開と自己意識の経験との二重の歴史記述として登場するのである。

このことは、後期の「体系」においても貫徹されていると見るべきであろう。「体系」は論理学において完成しており、これが精神哲学へと「応用」されるのでは断じてない。「体系」は概念の自己展開で完結しているのではなく、自己意識によって経験されるのでなくてはならない。精神哲学はこの自己意識による経験の叙述に他ならない。

しかし、精神哲学が実体の主体化と自己意識の経験の両方の運動を叙述しえたとしても、これを過去において完結したものとしてとらえるのであれば、哲学史の最終段階に位置づけられるヘーゲルの体系をもって哲学の歴史が終わって、それ以後、哲学は用無しであるということになる。体系をめぐるこれまでの不毛な議論は、哲学史を過ぎ去った過去の研究と考えることに由来しよう。ヘーゲルが批判する、哲学史を「阿呆の画廊」と見る見解も、「英雄の画廊」(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte. Bd. 6. Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. Teil 1.* hrsg. Von Pierre Garniron und Walter Jaeschke, 1994. S. 15. Und 5.) と見る見解も、これを自己意識の過去の経験と捉える誤謬である。

重要なのは、哲学史の研究それ自体が自己意識の自覚の運動であることの自覚であろう。哲学史は、過去の事実として学習され応用されるのではなく、我々が自己意識の自覚の歴史を自ら経験し、これをたどることである。実体の主体化と並走する自己意識の自覚の歴史は、哲学史を研究するまさにその時に、いわば個体発生が系統発生を繰り返すように、体験され、作り出されなくてはならない。哲学が哲学であるのは、哲学研究を通して、思惟する人々によって、哲学が再度生きられることによってである。

対象が実在的な世界における歴史である以上、史・資料は常に生み出され、また発見される。講義に際してヘーゲルが膨大な資料を駆使したことを、我々は講義録の分析を通して明らかにしている。ヘーゲルに就いて、我々自身が、哲学研究に実証的・思弁的に参与していくことを通して初めて、哲学の全体が動き出すのである。

【シンポジウム要旨—提題2】

概念史か隠喩史か——20世紀後半のドイツに見る「哲学としての哲学史」の諸相

下田和宣 (成城大学)

自分は哲学研究者か(≡哲学者か)あるいは哲学史研究者か、という二者択一の決断を迫る問いかけは、研究実践を方向づける態度決定に関するものであるかぎり、研究者自身の関心の種であり続けるに違いない。もちろんヘーゲリアンとしての正解は「哲学としての哲学史」研究もあると声をあげることだろう。それでも、こうしたトリアーデの誘惑に導かれる前に、「哲学としての哲学史」に関するさまざまな細かいバリエーションについて知っておくのは悪くないかもしれない。突きつけられた三者択一の前では、しばしばそこに存在するはずの差異が見えにくくなるのである。

本提題では、戦後ドイツ哲学史における「哲学としての哲学史」論の盛り上がりについて取り上げたい。戦後(西)ドイツの精神的復興を象徴するのは、ヘーゲル新版全集の編集(ヘーゲル・アルヒーフの設立)、および『哲学の歴史辞典』(HWPh)の編纂という、ドイツ研究振興協会(DFG)主導によるふたつの人文的の大事業であろう。同時期に遂行されたこれらのプロジェクトは、(経験科学・自然科学とのアナロジーによる)実証性を備えつつ「新しい古典」(ペグラー)を創設するという課題をパラレルな仕方で担うものであった。

まず、『哲学の歴史辞典』編纂を思想的に推進していた精神哲学的哲学史理解について明らかにする。歴史

研究の実証性と結びついた哲学の遂行というのが、DFG 概念史部会と雑誌『概念史アーカイブ』が模索したいわゆる「概念史研究」(Begriffsgeschichte)の理想であり、研究の代表者であるロータッカー、ガダマー、そしてヨアヒム・リッターらの気概であった。とりわけガダマーにおいて明らかなように、「哲学としての概念史」(1970)なる構想を支えその実現を促進させる理論的支柱として、ヘーゲルをはじめとしたドイツ精神哲学の伝統への信頼があったことはたしかである。彼らの期待を支えていたのは、精神哲学の具体的な遂行としての哲学史記述という構想にほかならない。ここでは概念史研究を解釈学的に正当化するガダマーの論考を頼りに、ヘーゲル哲学史講義に見られるいくつかのモチーフ(哲学の党派、導入としての哲学史構想、現象学としての哲学史)と比較することで、両者の親近性について明確にしたい。

問題はしかし概念史研究に対する別の期待である。「隠喩史」の記述を本来的な哲学史とするブルーメンベルクによる概念史批判を見ることで当時の緊張関係を浮き彫りにし、それによって非ヘーゲル的な意味での「哲学としての哲学史」の可能性を考察に加えてみることにしたい。

【シンポジウム要旨—提題3】

哲学史研究はどのようなものであるべきか——ヘーゲルの哲学史論から学ぶもの

三重野清顕 (東洋大学)

ヘーゲルによる哲学史記述については、さまざまな側面から批判的見直しが行われてきた。たとえば、現代のドイツ古典哲学研究の分野においては、カントからヘーゲルへと至る単線的発展というヘーゲル的描像が根本的に見直され、さまざまな思想家間の相互影響関係が詳細に解明されるようになった。時代的制約を考慮しても、中世哲学の扱いの極端な希薄さや、あくまで軸はヨーロッパ世界に置かれる等、そこで取り上げられる対象の偏りについても批判されうるであろう。

また、現代においては哲学史そのものについてのイメージも、ヘーゲルの見ていたそれとは大きく変わってしまったと言わざるをえない。たとえば、「最新の哲学はもっとも豊かでもっとも具体的なものであり、かつては全体として提示されていた哲学の以前のあらゆる諸原理を、みずからのうちに、ただしたんに諸契機として含んでいなければならない」、「論理学と哲学史における行程は即かつ対自的に一箇同一でなければならない」といったヘーゲルの諸テーゼは、現代においてはもはや維持できないものとみなされよう。また、哲学史はそれ自身完結した思想の自律的発展とは考えられなくなり、社会やさまざまな文化諸領域の相互関係の一要素として描き出されるようになってきている。

このような現状に鑑みて、歴史的な哲学の研究に携わる者がみずからの研究上の目的や規範をヘーゲルの哲学史論にもとづいて導き出すことはきわめて困難であるようにも思われる。現代において歴史的な哲学テキストに向き合う研究者が、ヘーゲルの哲学史についての議論から学ぶうことは何であろうか。本提題においては、ヘーゲル自身の哲学史研究の実際に即したかたちで、現代の哲学史研究がヘーゲルの哲学史論をどのように受け止めるべきかの検討を試みたい。